

## 自分を変えたい学生にとっての社会福祉学の可能性

小 高 良 友

### [1] 問題意識—そもそもの発端

ここ数年、私は本学の人間関係学科社会学専攻クラスと総合福祉学科クラスとで2年生と3年生のゼミを担当してきたが、2005年度の総合福祉学科2年生の前期ゼミを担当して実に印象的なことがあった。このゼミは、各自に選択してもらった文献を全員で読み合い、それについての意見交換を行っているのであるが、その何回かで、ゼミの学生たちが「自分に自信がない」「今の自分に満足していない」「自分を変えたい」と思っていることを私は何度も思い知らされたのだ。

「自分に自信がない」という点は本学学生のひとつの特徴だとかねてから思っていたが、それが「自分を変えたい」という点に強く関連していることに私は今更ながら印象づけられた。以前の私ならば、社会福祉士国家試験の受験体験を通じて自分に自信を持ってほしいと言っているだろうし、言っても来た。しかし、今年は自分が学科主任になって学生募集活動を強く意識するようになり、また、福祉士実習教育に携わってきて感じることに宗教活動との関連をここ数年意識することもあり、社会福祉学そのものが自分を変えたい学生にとっては強い魅力を持っていることを私はとても意識するようになった。

ただ、今までは漠然とそのことを考えていただけで体系的に頭を整理したことがなかった。本稿において試論ではあるが、その一端を果たしてみたい。自分を変えたい学生にとっての社会福祉学の可能性を考えてみることに、これが本稿のテーマである。

以下第2節では、本論に入る前に、自分を変えたい学生が全国的にどのくらいいるそうであるのかを、連続テレビドラマ『電車男』を手がか

りにして考えてみよう。第3節から第5節では、自分を変えたい学生にとって社会福祉学が大きな可能性を持っているという理由を3側面から考察してみたい。第6節では、自分を変えたい学生にとって東海女子大学総合福祉学科が持っている可能性に触れたい。

### [2] 『電車男』のヒットを考える

『電車男』。この作品は2005年の夏から秋にかけてテレビ放映された連続ドラマだ。毎年5サイクルの連続テレビドラマ(いわゆる「連ドラ」)の各初回は必ず見るようにしている私も、この作品については初めから見る気が薄かった。タイトルからでは魅力が感じられなかったからだ。しかし、初回を見て非常に興味がわいてきた。2回目を見て、続けて見たいという気持は決定的となった。

しかし、この作品が他の人にとってどう映るのかは当初は全くわからなかった。ところが実際はどうだろう。毎週の視聴率調査では、同じ時期に始まった連ドラをほぼ毎週おさえて、この作品がトップをほぼ独走した。「へー、他の人にとってもこの作品は面白かったんだ」。

最終回から2週前、特別番組のためこの作品が1週だけ放送されなかった。その時期、近所のコンビニに入ると、高校生の男の子たちが、この作品がその週は放映されないことを残念そうに話題にしていた。「へー、彼らも見てるんだ」。息子に聞いてみると、中学でもこの作品が妙に話題になっているという返事が返ってきた。「へー」、私はまたびっくりした。

同じ時期の連ドラでは、登場タレントの点ではるかに視聴率を稼げると思われた作品が他にいくつかあったが、意外にも『電車男』はそれらを押さえてトップを走り続けた。

この物語は、電車内でセクハラされている素敵な美人をさえない「オタク青年」が助け、インターネットの掲示板仲間に支えられてその美人との恋を成就していく物語だ。そのオタク青年は、典型的な「オタク」のため、家族からもバカにされ、女性と話すこともままならない。電車内でセクハラされている美人を助けた場面も決して格好のよいものではない。二人で並んで歩いても、彼女のほうがはるかに背が高い。その青年がインターネットでのみつながっている掲示板仲間たちのアドバイスを受けながら少しずつ勇気を出し、自分を絶えず変えていきながら、最後には彼女のハートを射止める。恋の成就に向けて変身しながら突き進む主人公のオタク青年をインターネット仲間が「電車男」と名付けた。この作品がなぜ受けたのだろうか。

少なくとも私にとって面白かったのは、インターネットの掲示板仲間がオタク青年を励ますという設定自体が新鮮だったこと、その恋のプロセスに親近感・現実感を持てたこと、オタク青年とはどういう青年なのかに興味があったこと、音楽の使い方が巧みだったこと、登場人物の魅力、などの点だ。

一般的にみるとこの作品はどのようなのだろうか。この物語は、いわば「自分を変えたい人」の物語だ。それは東海女子大学の私のゼミ生とその点で同じだ。ということは、自分を変えたい人がこの作品を見ていたとも想像可能だ。もちろんそれがこの作品が見られた理由のすべてでないのはもちろんだが。

他には、仲間、友情、励まし。言い古されたことがらが、インターネットという媒介を通して、新しい感覚で描かれた。主人公の青年は決して格好良い美青年ではない。演じている男優は、一般的には美青年であろうが、作品内での登場人物としてはオタク青年であるという設定で、一般的にはさえない役を演じている。それは、いかにももてそうな「非現実的」青年ではなく、「自分はここまでではない」とある意味で視聴者が安心して見られる「さえない」青年という人物設定だ。その青年がまじめに誠実に生きている姿がとても印象的だった。不器用な恋する心が新鮮に描かれていたところも面白

かった点だろう。それは『冬のソナタ』とは違った現実感のある純愛物語だ。

本稿の文脈に戻ってみよう。ともかく、「自分を変えたい」主人公を描いた連続テレビドラマがヒットしたということは注目に値する。

「自分を変えたい」人に、社会福祉学の可能性を少しでも知ってもらいたい。

### 【3】社会学と社会福祉学との違い

私のもともとの専門分野は社会学である。社会福祉学は伝統的に社会学の一分野として位置づけられることが多かったが、その位置づけには随分と違和感が感じられる。

そもそも私にも自分を変えたい願望がとても強くあり、それは自分が大学に入学した当時へとさかのぼる。当時の私は、生きる意欲が欠如していた。大学に入ったら一度自分の価値観をすべて解体して点検してみようと高校時代から考えていた私は、大学に入学すると同時にその作業を始めてみた。ほどなく、「なぜ生きているのか」ということも疑うようになった。こうなると、すぐに回答など見つかるわけでもなく、当時の私は1日、1週間、1ヶ月単位で命をつないでいた。

生きている意味を知るために、また、自分がどのような仕事に向いているのかを知るために、いわば自分探しのために、私はいろいろな本を読み、いろいろな人に会い、いろいろなところでかけることを心がけた。

そんなことを繰り返すうちにわかってきたのは、生きる意味などそう簡単にはわからないものであること、一生をかけて答えを探すものかもしれない、という点であった。

とりあえず、社会現象の本質を見抜くような目を持ちたいと私は思い、そのような仕事につくことを考え始めた。そのときの私には、同性愛についての社会学的研究を突破口にして研究者になることがその道に適合するのではないかと思われた。

長い時間はかかったものの、結局は私は社会学の大学教員になり、これまで過ごしてきたわけだ。社会学とは、確かに自分を変える契機を

持っている学問ではある。オーバーに言えば、社会科学系、人文科学系のすべての学問がそのような契機を含んでいるような気はするが、社会学の場合は、自分が社会的人間であるということに自覚するさまざまな機会を通じて自分を再発見する機会が得られる。それによって自分を変えるチャンスが得られることになる。

ただ、社会学によって自分が社会的人間であることを自覚できても、その上で自分を変えていく更なる具体的方途を持っていないことが、社会学の弱みである。

社会福祉学は其の点で自分を変えていく具体的方途を持っている。それは社会福祉学が実践的学問であるからだろう。大学で社会福祉学を学んだだけでそれを生かすような仕事につかなかった場合は、その限りではないと思われる。しかし、社会福祉学を生かすような福祉の分野の仕事についた場合は、自分を変えていく機会に事欠かないだろう。

東海女子大学に赴任してから、社会学専攻教員と社会福祉学専攻教員のふたつの機会を私は経験することになったが、それは、ふたつの学問の違いを強く意識させられるよい機会でもあった。社会学の場合には、福祉現場実習の履修がない分、育てている学生たちについて社会から外部評価を受ける機会は学生が卒業しなければやってこない。ところが、社会福祉学の場合には、福祉現場実習の機会が在学生のうちにあるため、育てている学生の外部評価を現役生のうちに社会から受けることになる。これに私はとても戸惑ったものだ。

福祉実習先の施設から実習学生についてのさまざまな注文を受ける機会が多くなり、それに伴い、社会福祉学が実践的学問であることを私は強く意識させられた。

その意味では、社会学のほうが教員にとっては気が楽だ。少なくとも、学生が在学中は外部評価を受ける機会がなく、学生が卒業してしまえば、就職先からの卒業生評価には直接自分が触れる機会がなく、その意味で気が楽なのだ。

#### 〔4〕 宗教活動と社会福祉実践活動との類似性

宗教活動と社会福祉実践活動の間には類似点があるように思われる。私がそれに気づいたのは、私が「社会福祉援助技術現場実習」という授業を担当するようになってからだ。「社会福祉援助技術現場実習」とは、社会福祉士の受験資格を取得するために履修が必要な科目の一つで、学生が社会福祉施設に4週間実習にでかけるための準備と、実習中のフォロー、実習後の指導を行う授業である。

宗教活動と似た要素が社会福祉活動にはある。社会福祉従事者の卵たちである本学学生たちを見て、宗教者と似た雰囲気を感じた。このような学生さんたちになら自分が年をとってから施設で面倒を見てもらってもいいかなと私はまじめに考えるようになった。

両者に共通しているのは、自分の幸せだけではなく他者の幸せも願いながら生きていく、という思いだろう。この思いは実践に移されたとき、自分の中に眠っている潜在的なエネルギーを引き出す力を持っている。そのエネルギーが出てきたとき、自分だけの悩みに縛られていた自分から解放される契機が生まれてくる。自分の悩みに立ち向かう力が出てくるのだ。それは、自分の悩みに四苦八苦しているだけでは出てこない力だ。宗教活動の魅力の大きなひとつとは、おそらくこれだろう。社会福祉学はそれが実践に移されると、それと似たような作用をもたらすように思われる。だからこそ、社会福祉学は自分を変える可能性を持っているのだ。

以上の点を以下でもう少し詳しく述べてみよう。

##### (1) 自分を変えることと宗教活動との関係

宗教活動の魅力とは何だろうか。宗教を持たない人からは不気味に見えるかもしれないが、内部にいる私としては、いろいろな要素はあるが、最大の魅力の一つは、自分を変えていける力を宗教活動が持っている、ということだ。自分を変えようとする契機はいろいろだが、ひとつは、人生に起こる様々な苦難を乗り越えるために自分を変えたいと思う時だ。経済的な悩み、

人間関係の悩みなどにはまったときは、特にそうだ。宗教活動は、自分にはとても乗り越えられないと思っている苦難を乗り越えていける自分に変えていく潜在力を引き出させてくれる。自分を変えていくのは自分だが、その力を引き出す契機が宗教活動のなかにはある。

私がそもそも宗教を持つようになったのは、生きる意味を知りたい、ということももちろんあったが、この先「努力と信念」の人生だけでは自分をさほどは変えられまい、と思ったことが大きい。自分をもっとダイナミックに変えていけるようなきっかけが私は欲しかった。

信仰を持って約25年が経過したが、宗教には自分を変えていける力が無尽蔵にある。私のもっている宗教は創価学会の宗教だ。私は他の宗教のそれぞれに入会して実践したわけではないため、ここで私が論じていることには、厳密に言うと、創価学会の信仰活動の限りでは、という限定がつく。ただし、他の宗教についても日常的に学習する機会が多いため、ここで論じている限りのことは、程度の差はあれ、おそらく他の宗教においてもほとんどあてはまるのではないかと私は予想している。

## (2) 宗教活動と社会福祉実践活動との共通点

宗教も多種様々だ。従って、どこまで一般論で語れるのかの不安はあるが、自分が携わっている宗教の限りでいえば、「自分だけの幸せを追求するのではなく、同時に他の人の幸せも追求しようとする」ような思いを抱いて生活していくという点で、宗教活動と社会福祉実践活動には共通点があるように思われる。

私が信仰している宗教は、「自分だけの幸せを追求するのではなく、同時に他の人の幸せも追求しようとする」思いをもった活動を「化他業」と呼ぶ。自分のことで精一杯の人生の中でひと様の幸せまで考えながら生活するなどおこがましいと思う人もいるかもしれない。どの程度そのようなことができるかにはもちろん限界はある。だが、その姿勢を持ちながら生活していくのとそうでないのとでは、生き方に微妙な差が出てくる。

「化他業」の姿勢を持っていると、自分の生

命空間が確実に広がるのだ。そのなかで、自分の悩みだけにとらわれていた自分が小さなものに見えてきたり、自分の悩みが些細なものに見えてきたりする。こうなると、自分を変える契機が出てくるのだ。

信仰を持って「化他業」をしている人々の大半は職業として信仰活動をしているわけではないため、その点では、社会福祉活動を職業にしている人々と違いがあるかもしれない。しかし、仕事にしようがしまいが、「化他業」という要素の点では、両者に類似性はあるように思われる。

宗教活動の場合は、自分の生命力を高める手段として信仰対象がある場合が多いが、社会福祉活動を行っている人々にはそのような手段はない。その意味では、社会福祉活動の場合、自分を変えていくには「不十分」かもしれないが、しかし、「自分を変える力」は社会福祉活動にもあるように思われる。

## (3) 実務的学問の実践活動と社会福祉実践活動との違い

「化他業」の姿勢を持っている実務的学問は社会福祉学に限られない。おそらく医学も色濃くその姿勢を持っている。したがって、医療活動も社会福祉実践活動と同様の要素を持っているはずだ。

あえて二つの違いを言えば、医療活動のほうが制度的に確立した歴史が早いため、いろいろな点で恵まれている分、「化他業」の要素は薄まっているかもしれない。

もちろん、世にあるあらゆる仕事は、いろいろな形で人の役に立とうとし、そのことの対価として収入を得ることができる。その意味では、あらゆる仕事は「化他業」の要素を多少なりとも持っている。となると、いわゆる「経済的利益」の追求の思いと化他業の思いとのどちらの思いが強くなるのか、どちらを根本とするのかによって、化他業の効力を発揮できる程度に違いが出てくるように思われる。

社会福祉領域の仕事は、その意味ではまだまだ「経済的利益」の追求とは縁遠い仕事領域だ。この領域がビッグビジネスの領域になったら、社会福祉実践活動には「自分を変

える力」を発揮できる契機があまりなくなるのかもしれない。

#### (4) 卒業生たちは何と言っているか

私の場合、宗教活動は約 25 年の歴史があり、実践をしているので、その意味では私の思いもある程度の実証に裏付けられていると思っているが、私は社会福祉現場で実際に仕事をしたわけではない。もっとも、私の場合、社会福祉現場に出ていく学生たちの教育に携わる分、他の学問分野の方々よりは、社会福祉現場で働く人々との接触の機会が多く、また、社会福祉現場に就職した卒業生たちと触れあう機会も多い。しかし、いずれにしろ、社会福祉の職場で自分が何年も働いてきたわけではないので、私のこれまでの話はあくまでも推論である。その意味での限界はある。

学生募集活動の一環として、高校 1～2 年生中心にここで述べているような話をする機会があり、そのお手伝いをしてもらった二人の卒業生に、私の話を聞いてどう思ったかを尋ねてみた。自覚的に考えたことはなかったが、そう言われてみるとそうだったのか、と自分の仕事の意味について気づくことがいくつかありました、との回答が返ってきた。

実際の福祉現場は他の仕事と同様きれいごとだけで済むはずもなく、「小高の言うことなど甘い」という声が聞こえてきそう。それでも、そこで働く人々を引きつけている大きな要素は、社会福祉の現場が人に感謝される職場であること、自分を変える契機を持った職場であること、これではないだろうか。

### [5] 社会福祉士試験の意味

社会福祉学が持っている「自分を変える力」を補強しているのが、おそらく社会福祉士試験の存在ではないだろうか。

国家試験一般がそのような力を大なり小なり持っているのであろうが、その力を最大化できるかどうかは、試験の「難易度」と「挑戦可能性」のふたつがおそらく重要だ。

司法試験のような超難関試験は、自分に自信

をつけられる大きな試験ではあろう。ただし、この試験は合格率が低すぎて、一般的には多くの人に挑戦可能な試験だとは言えない。その意味で、社会福祉士試験の全国合格率がほぼ毎年 30%程度というのは最適な数字だ。

これぐらいの合格率だと、まずはどの人にも挑戦可能性がある反面、そう簡単に合格できる難易度の試験ではない。どのような偏差値ランクの大学に入ろうと、国家試験そのものは同じ問題で平等だ。大学入試で失敗をしても、社会福祉士国家試験で恨みを晴らすことも不可能ではない。

そういう意味で、自分に自信のない学生ほど自分に自信を持って自分を変えていく大きな契機となるのがこの試験だ。

かつての東海女子大学は、社会福祉士試験に合格者を出すことができなかった。教員たちも学生たちもうちの学生には無理だと思い込んでいた。一人だけでいいから合格者を出せばいい、という教員もいたくらいだ。しかし、その歴史は変わった。

第 2 回から第 7 回までの社会福祉士国家試験において、東海女子大学の合格率は 0%であったが、第 8 回(1996 年 1 月実施)の国家試験で 83.3%の合格率を出し、以降、第 17 回(2005 年 1 月実施)の社会福祉士国家試験までの 10 年間、東海女子大学は 65%～90%の現役生合格率を出し続けている。このように変わった事情の詳細は他稿<sup>1</sup>にゆずるが、全国に誇れる合格率を出せるようになってみた気づいたのは、この社会福祉士試験に合格できることが学生にとって持つ意味である。この試験の威力は単なる合格だけでは終わらない。この試験は、合格した学生が自分に自信を持ち自分の潜在的な能力を引き出す大きな契機を与えてくれる。その一端の詳細は他稿<sup>2</sup>にゆずろう。この試験に合格した学生たちは、就職後に、介護福祉士試験に挑戦したり、精神保健福祉士試験やケアマネジャー試験に挑戦して合格を勝ち取っている。東海女子大学に在籍しているときの彼女たちは、私が率いる受験対策講座でみっちりしごかれるが、卒業後は一人でそれらの試験に挑戦して難なく合格している。社会福祉士試験に合格

した学生たちが口を揃えて言ってくれるのは、自分に自信が持てるようになりました、という言葉だ。

社会福祉活動はもともと自分を変えていく力を持っていると思われるが、社会福祉士試験の存在がさらにその力の引き出しを補強しているわけだ。

## 〔6〕終わりに—東海女子大学総合福祉学科の独自性・可能性

自分を変えられるという性格は社会福祉学一般が持っている。その意味では、社会福祉学を学べるどこの大学に行っても、自分を変えたい高校生にとっては自分を変えられる可能性があるという点は同じだ。しかし、その性格をいかに発揮できるかどうかは入学する大学によって差が出てくる。

東海女子大学の場合、①社会福祉士国家試験合格率が抜きんでていること、②少人数教育をしていること、③卒業指導に力を入れていること、これらが、社会福祉学が持っている上記の性格をいっそう強力なものにしている。

受験対策講座をやればどこの大学でも社会福祉士試験の合格率を上げることができると思っている高校の先生方がかなりおられるようだ。それはあまり正しくない。受験対策講座の中身が問題だ。東京大学や京都大学に入学できる学力を持つ学生の場合には、社会福祉士試験は、受験対策講座など設けなくても、おそらく独自の勉強で合格できる可能性を十分持つ試験だ。ところが、勉強する習慣があまり出来ていない学生の場合、この試験は、受験勉強の仕方だけをアドバイスする受験対策講座では合格が難しい試験だ。かつての東海女子大学での受験対策講座はそのような講座であった。今でもそのような受験対策講座はたくさんある。その種の講座の場合、受験生たちは、体験談として聞いた先輩の受験勉強の仕方を自分のものとして取り入れて実践することが往々にしてできない。先輩はすごいが自分にはできない、で終わってしまうのだ。そのようにあきらめてしまう受験生でも、なんとか合格させられるような受験対策

講座にするためには、いろいろと工夫と経験が必要となる。それはそう簡単に可能なものではない。

社会福祉士の受験資格を取得するためには、社会福祉援助技術現場実習の履修が必須となっている。この現場実習は、社会に出る前の実社会での予行練習のようなものである。これは手間暇がかかる教育となる。この教育は大量生産も不可能ではないが、実際に仕事についたときのことを考えると、少人数でじっくり教育する必要がある。

社会福祉の仕事は、現場に出てから自分を振り返る場が必須の仕事である。また、社会福祉士国家試験に合格できずとも就職内定取り消しとはならない場合がまだまだ多いとはいえ、介護保険や支援費制度の導入などにより、就職後も社会福祉士資格の取得が年々求められるようになっていく。

社会福祉士試験は、介護福祉士試験と異なり、制度内容を問う問題が中心となるため、抽象的に覚えなければならない内容が多くなる。それを覚えるにはかなりの時間を要する。つまり、社会福祉士試験は、社会人よりも現役生のほうが有利な試験なのだ。就職してからこの試験に挑戦する場合は、それでなくても仕事をしながらの受験勉強になるため、強力な受験対策のバックアップが必要となる。東海女子大学は、卒業生用の通信制受験対策講座を開講している。

また、卒業生の自発的研修会もバックアップする体制がとられ、卒業生の実践報告大会を毎年開催して、大学発の研修の機会も設けられている。

いずれにしろ、本稿で述べてきたことは、これから数多くの証明が必要となる。本稿を第1弾として、今後更なる検証を重ねていきたい。

ところで、『電車男』とは、インターネット仲間たちが一人の青年のことを自分のことのように心配してその幸せを後おししていく、いわば「化他業」物語でもあった。それが押しつけがましくなく、現代的にさわやかに描かれている。そのようなところも視聴者の心を得たのだろうか。その点に共感できたひとは、社会福祉

学やそれを生かす福祉の仕事にもぜひ目を向けていただきたい。

**註**

- (1) 小高良友「社会福祉士国家試験受験論－受験を体験した教員として」、『社会福祉士』5、1998、144-151頁。
- (2) 小高良友「社会福祉士国家資格の取得効果を考える」、『東海女子大学紀要』19、2000、201-215頁。